

性格批評は「女性的で、主観的で、怪しい」批評様式であったのか 英米の学術雑誌*The New Shakespeare Society's Transactions* と *Shakespeariana* をもとに

風間 彩香

はじめに

シェイクスピア批評史において、シェイクスピア劇の登場人物を生身の人間としてみなし、原作中の言動から性格を割り出し分析する性格批評 (character criticism) は、Maurice Morgann (1725-1802) から S. T. Coleridge (1772-1834) などのロマン派に受け継がれ、Anna Brownell Jameson (1794-1860) といった女性批評家の台頭も生みだしながら、A. C. Bradley (1851-1935) に結実するという系譜で理解されてきた。本発表では、批評史において取りこぼされてきた性格批評の広がり的一端を把握することを目指した。そのために、19 世紀後半にかけて発行された英米の二つの学術雑誌 *The New Shakespeare Society's Transactions* (以降 *Transactions*) と *Shakespeariana* を分析した。特にこの二誌を取り上げる理由は、性格批評の勢いが活発になった 19 世紀後半にかけて発行されていること、女性の参加や投稿を広く呼びかけたことが挙げられる。具体的にはまず、*Transactions* に掲載された性格批評関連論文から、執筆者の性別や職位に関する統計調査の結果を示した。また、その中から特に Countess of Charlemont の論考と、そこに付されたソサエティの創設者からの講評を取り上げ、当時の性格批評理解を分析した。次に、*Shakespeariana* に掲載された各地のシェイクスピア・クラブでの活動を報告する Shakespeare Societies のコーナーに注目し、シェイクスピア受容において性格批評がどのように機能していたのかを明らかにした。

1. *Transactions* における性格批評関連論文について

Transactions を発行した The New Shakespeare Society は、1873 年に英語学者の Frederick James Furnivall (1825-1910) によってロンドンで設立された。*Transactions* は、1874 年から 1892 年まで発行され、毎月開催された定例会で発表された原稿が掲載された。初刊から終刊までを対象に、性格批評を抽出するため、劇中の登場人物の名前を題目に含むこと、character (性格) という語を題目に含むこと、の二点から調査対象を絞った。性別や身分に関しては、論考の執筆者名に付された敬称や職位や学位から判断した。その結果、性格批評関連論文の執筆者の性別に関しては、男性 6 名、女性 6 名と、その割合は拮抗していた。そして、男性執筆者はすべて大学での教授職にある者や、学位や爵位をもつ者であった。また、*Transactions* に投稿された論文 87 本の内、性格批評関連の論文は 13 本であり、誌面全体に性格批評が占める割合は約 15% であった。シェイクスピア劇の書誌的事実や創作年の特定や、韻律や語句表現の量的調査を志向したソサエティの特徴を考えると、誌面に性格批評が占める割合は顕著に高いと言え、19 世紀後半のシェイクスピア研究における性格批評への関心が大きかったことがわかる。

Transactions に掲載された Countess of Charlemont (以降 Charlemont) の論文“*Gruch (Lady Macbeth)*”(1876) の末尾には、他の論文には見られない、ソサエティの創設者 Furnivall からの講評が付されている。この論文で Charlemont は、系図学者による王族などの血筋を記した書に基づき、マクベスと結婚する前のグルアクの系図をたどり、ダンカン王はマクベス夫人の祖父を退位させた人物の孫であったことを指摘し、原作でのマクベス夫人の台詞を加味しながら、マクベス夫人には復讐のためというダンカン王殺害の正当な理由があったと述べる。Charlemont の論は系図には基づいているが、原作前のマクベス夫人の血縁や一族の歴史に遡り、原作での出来事と接続させる点で、女性執筆者に特徴的に見出されると考えられている、原作以前の登場人物の人生を想像する性格批評の典型であると言える。これに対し Furnivall は、ダンカン王とマクベス夫人の父との間に血縁があるという示唆は興味深いとしながら、『マクベス』の主要な材源である *Holinshed's Chronicles* (1577) にはそうした記述は見られないと彼女の性急な議論を戒めている。その後、Charlemont の論点はマクベス夫人の人物像に移る。原作におけるマクベス夫人の台詞からは優しい女性としてのマクベス夫人像がうかがえるとし、マクベス夫人は夫の王位に就きたいという野心のために殺人を唆したに過ぎないと結論づける。この主張に対して、Furnivall は再び材源に依拠し、マクベス夫人にも王妃になりたいという野心があったとし、Charlemont に反論している。ここで、材源における記述からマクベス夫人の野心を推量し、それを原作での殺人教唆の要因とみなす Furnivall の記述は、Charlemont と共通した解釈戦略をとっている点で、性格批評に連なる。

2. *Shakespeariana* のシェイクスピア・クラブ活動報告における性格批評

Shakespeariana は Shakespeare Society of New York により 1883 年から 1893 年まで発行された。女性にも広く門戸が開かれ、幅広い読者を想定し多様な誌面づくりを行った。その中には、アメリカ各地に作られた、またはイギリスやフランス、カナダなど海外で結成されたシェイクスピア・クラブやソサエティの活動を紹介する Shakespeare Societies というコーナーがある。シェイクスピア研究者から構成されたものから、一般のシェイクスピア・ファンによって構成されたものまで多様な組織の活動が、プロ・アマチュアの区別なく紹介されている。Katherine West Scheil (2012) によると、1880 年代から 1900 年代にかけて教養を深めるために

アメリカ各地にシェイクスピア・クラブが作られたという。それらは、女性だけで構成されたもの、男女共同のもの、男性のみで構成されたものなど様々であった。特に女性たちは、シェイクスピア・クラブでディスカッションの経験を積み、社会問題に関心を向け、図書館の設立などコミュニティの変革にもつながったと Scheil は述べる (57-60)。シェイクスピア・クラブの創設や活動の活性化に関しては、*Shakespeariana* もクラブ設立のポイントを紹介し、活動の進行についてのアドバイスに関する記事を掲載するなど尽力し、その中の *Shakespeare Societies* コーナーもシェイクスピア・クラブの活性化のための一環であると考えられる。

多様な学問的、職業的背景を有した会員が性格批評に取り組んだことの例として、ペンシルバニア州の *The Greensburg Shakespeare Society* がある。これは弁護士や編集者、エンジニアなど様々な職業の 15 人の会員で構成されている。入会条件はシェイクスピア研究に強い関心をもっていることであり、本ソサエティで重点を置く分野は「劇の美的研究」(an aesthetic study of the plays) と述べられる (*Shakespeariana* Vol. 1: 60)。「美的研究」は当時、登場人物の性格造形や言動の背景に関する考察を指す際に頻繁に用いられた。例えば、*Hollins Institute* の教授 William Taylor Thom (1849-?) の著書では、『ハムレット』と『マクベス』に関してそれぞれ約 60 問の問いと、2 人の女子学生の解答が掲載されている。各問いには見出しが付されており、登場人物の考察を求める問いには「美学に関して」(Aesthetic) という見出しがそれぞれ付されている。登場人物に焦点化する分析は美学の領域に配置され、登場人物分析に注力する、多様なメンバーで構成されたコミュニティが存在した。また、クラブ内で議論された具体的な読解の内容が比較的詳しく記載されているのが、*Montreal Shakespeare Club* である。これは、オックスフォード大学のシェイクスピア・クラブ出身の R. W. Boodle がカナダに移住後に、モントリオールで同様のクラブを作ろうと考えて創設された男性限定のクラブである (*Shakespeariana* Vol. 1: 28)。毎週のミーティングでは、1 つのシェイクスピア劇が取り上げられ、関連のエッセイが発表された。例えば、1886 年 11 月 2 日のミーティングでは、『ハムレット』が取り上げられ、オフィーリアの少女時代を推測し、それらを原作での出来事と接続する論などが発表された (*Shakespeariana* Vol. 3: 578)。主役のみならず脇役にも目を向け、個々の登場人物の内面や特徴に関心が向けられており、女性の性格批評の特徴としてみなされがちな登場人物の原作以前の人生を想像する解釈戦略が男性発表者により採用されている。

まとめ

本発表では、英米の二つの学術雑誌 *Transactions* と *Shakespeariana* を通して、19 世紀後半のシェイクスピア研究・受容における性格批評の浸透の度合いや役割を分析した。まず、*Transactions* の調査からは、当時のシェイクスピア研究において性格批評への関心が広く共有されていることが確認できた。次に、*Shakespeariana* に掲載されたシェイクスピア・クラブの活動報告に注目し、性別やプロ・アマチュアの垣根を越えて、性格批評を媒介にしてシェイクスピア受容が展開されていることを明らかにした。以上のように、これまでのシェイクスピア批評史では見過ごされてきた性格批評の展開を示した。

引用文献

- Charlemont. "Gruach (Lady Macbeth)." *The New Shakespeare Society's Transactions*, Series I, No. 4, 1876, pp. 194-9. *The New Shakespeare Society's Transactions*. Trubner & Co., 1874-92. 14 numbers.
- Scheil, Katherine West. *She Hath Been Reading: Women and Shakespeare Clubs in America*, Cornell University Press, 2012.
- Shakespeariana: A Critical and Contemporary Review of Shakespearian Literature*. Leonard Scott Publication Co., 1883-93. 10 vols.
- Thom, William Taylor. *Two Shakespeare Examinations: With Some Remarks on the Class-room Study of Shakespeare*, Ginn, Heath, & Co, 1883.